

年間第 19 主日（平和祈願ミサ）（ルカ 12:32-48）

日本の教会は小さな群れだが、平和の働き手



「小さな群れよ、恐れるな。」（12・32）イエスを信じる神の民は、いつの時代も小さな群れでした。日本でカトリック信者は全人口の中の 41 万 8 千人です。このミサに来ている人はさらにその 300 分の 1（来たくても難しい人もいるでしょうが）、本当に小さな群れです。その小さな群れにもイエス様は「恐れるな」と力づけてくださるのです。

広島と長崎の被爆者手帳を持っている人が今年 3 月時点で 10 万人を切ったそうです。体験を直接語れる人が本当にいなくなる。そんな時がそこまで来ています。戦争は絶対にしてはいけない。核兵器は決して使用してはならない。実体験から確信を持って語れる人々は、イエス様がおっしゃる「小さな群れ」になりつつあります。しかしその小さな群れにも「恐れるな」と言っておられるのではないのでしょうか。

それは、神が必ず希望を与えてくださるからです。小さな群れが、未来を希望できるようなしるしを、与えてくださるからです。例を一つ紹介しましょう。長崎の 83 歳の被爆者の体験を語り継ぐ小学 4 年生のニュースはご覧になったでしょうか。高齢化する被爆者本人に代わって、その家族以外の人々が体験を語り継ぐ「交流証言者」に、東京都世田谷区の小学 4 年生が被爆者団体から正式に認定されました。

家族旅行で長崎市を訪れ、原爆資料館を見学した際、館内を案内してくれたボランティアガイドとの出会いがきっかけだったそうです。

「あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」と約束する神が、この世界に今も働いている一つの証拠ではないのでしょうか。

「暗いと不平を言うよりも、すすんであかりをつけましょう」最近この言葉は聞きませんが、「暗闇のあるところに光を」これが平和をもたらす鍵だとしたら、現代の暗闇に、私たちは積極的に手を伸ばして光を灯さなければなりません。平和をもたらすためには、平和を願うと同時に、平和のために働く人にならなければならない。当然のことです。

小さな命が危険にさらされている。幼い子供が邪悪な大人に狙われている。すべての人に保障されるべき権利が踏みにじられている。格差が拡大し、絶望を生んでいる。こんな社会に私たちは置かれています。「私一人が何かを始めてもどうにもならない」そう思うかもしれませんが、「小さな群れよ、恐れるな」とおっしゃるイエス様は、必ず私たちが一人で始めたことに背中を押してくださり、見える形にしてくださいます。平和が満ち溢れる神の国を感じられるようにしてくださいます。

今日のミサは、神が平和への働きを必ず実らせてくださることを祈願するミサであり、祈願したことが与えられるミサです。こうもおっしゃっています。「どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心をつなげて求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。」（マタイ 18・19）

平和祈願はこれで良いでしょう。しかし、皆さんの心の奥には、いまだ晴れない疑念があるかもしれません。つまりこういうことです。

「私たち下五島地区のカトリック教会は、実に小さな群れですが、本当に大丈夫なののでしょうか。希望を持てるのでしょうか。」

小教区の再編が近づき、司祭数の削減も現実味を帯びています。今できることを言いましょう。皆さんが下を向いて説教を聞いているから疑念が拭えないのです。顔を上げてごらんなさい。祭壇右の垂れ幕に何と書かれていますか。「神よ、あなたは私の希望」と書いてあるでしょう。これは「そうだったら良いよね～」ぐらいの言葉でしょうか。それとも、私たちが固く信じていることを文字にしたものなののでしょうか。

フランシスコ教皇が亡くなられた頃、ちょうど国内で「教皇選挙」という映画が上映されていて、一般の人のあいだでかなり話題になっていました。一般受けするように制作されていたと思います。私もネットのサービスで観ましたが、「事実は映画よりも奇なり」誰も予想していなかった枢機卿様が教皇レオ 14 世として即位されました。間違いなく、平和のため先頭に立って働いてくださるでしょう。

教皇選挙。それは、人間のなせるわざではなく、神の働きです。神が私たちに示された新教皇レオ 14 世は最初に次のようにあいさつされたそうです。「あなたがたに平和があるように。」下五島地区のカトリック教会にもこの言葉は向けられています。私たちが下を向かない限り、教会は私たちの希望であり続けるし、父なる神は喜んで神の国を、未来への希望を、与えてくださるのです。

ただ、人間的なことを言わせてもらえれば、握手をしたくない人は確かにいます。私にもどれだけ金を積まれても握手したくない人がいます。教会内がそうであるなら、教会は内部から分裂し、小さな群れは散り散りになってしまいうでしょう。

それでも「平和のために働くことはできる」と言いたいのです。私はあの人とはいくら頼まれても握手したくないけれども、手を開いて十字架にはりつけにされたキリストを通してであれば、手を取り合うことは可能かもしれません。私たち小さな群れが神の国の平和を願い続ける理由が見つかりました。神は私たちの希望であり、手を取り合えないほどいがみ合っている、十字架上のイエス様が仲介して手を握らせてくれる。そうして次世代への希望を見いだすことができるからです。

加えて天国からも、先に旅立った人々が小さな群れである下五島地区の教会を助けてくれると思います。今年の巡礼指定教会の一つである打折教会に、私は何度も聖体訪問に行きました。ご存じと思いますが、使徒ヨハネ中濱繁喜神父様と縁の深い教会です。生きているときは一日でも長くこの世にいてくださるように、亡くなってからは神さまのもとでゆっくり休めるように、祈りをささげてきました。行きたんびにわざと巡礼ノートにも名前を書き付けてきました。

その繁喜神父様が先月私の夢枕に立ったのです。尊敬する川添主任神父様でさえ夢に出てきたことが無いのに、繁喜さんが夢の中でこう言うのです。「なかだぁ。わいは夏休みば取ろうとしよるやろ。ちゃんと同じだけ助任にも夏休みばやらんばぞ。」

余計なお世話じゃと思いましたが、繁喜神父様を通して、イエス様は「小さな群れよ、恐れるな」そして「主人が召し使いたちの上に立てて、時間どおりに食べ物を分配させることにした忠実で賢い管理人」を現代の教会にも与えてくださると考え、安心したのです。

日本のカトリック信者は小さな群れですが、恐れる必要は無いし、これからも希望の巡礼者として歩んでいくことができます。両手を開いてはりつけにされているイエス様が、すべてを叶えてくださいます。